

Nagoya Urban Institute News Letter ニュースレター

名古屋都市センター

2013.9 vol.97



中川運河沿岸の倉庫をスクリーンに見立てた、民間団体によるビデオアート(写真提供:中川運河チャンネルアート)

[特集]

名古屋を支えた物流の運河から にぎわいと創造の水辺へ

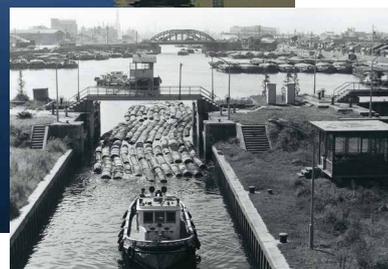
中川運河の再生をめざして

Contents

[特集]名古屋を支えた物流の運河から にぎわいと創造の水辺へ 中川運河の再生をめざして	1~3
PERSON	4
まちづくり助成団体紹介	5
名古屋都市センター研究成果	6~7
まちづくり来ぶり	8
なごやのまち今昔	9
活動報告	10~11
お知らせ	12



都心を望む中川運河の広大な水域(袖原氏撮影)



水運が盛んだったころの中川口閘門で、いかだを曳く舟

「東洋一の大運河」と呼ばれて

中川運河は昭和7年の全線開通以来、名古屋港と旧国鉄笹島駅を結ぶ水運物流の主役として、名古屋の経済・産業を力強く支えてきました。総延長8.2km、最大幅91mというスケールの大きさから、建設当時「東洋一の大運河」と呼ばれました。高度成長期を境に物流の主役は水運から陸運に替わり、今では1日平均数隻の船が行き交うのみです。これに対し近年、運河を生かした水上スポーツや現代アートなど、新たな取り組みも見られます。昨年10月には中川運河に新たな価値と役割を見いだそうとする「中川運河再生計画」が、名古屋市と名古屋港管理組合により策定されました。取り残された物流運河を、活力にみちた都心の水辺に再生できるかどうか。中川運河をめぐる動きと可能性を探ってみました。



[特集] 中川運河の再生をめざして

水辺に新たな息吹を注ぐ

中川運河に関する計画としては、1993年に水運物流の減少などを背景に「中川運河整備基本計画」が、名古屋市と名古屋港管理組合により策定されています。それから約20年、少子高齢化の進行や価値観の多様化など社会環境の変化を受け昨年、新たな整備計画が「中川運河再生計画」として策定されました。この計画では、中川運河整備基本計画の進捗も踏まえつつ、おおむね20年先を見据えた再生構想と、おおむね10年間の取り組み内容を示しています。

再生理念に「歴史をつなぎ、未来を創る運河～名古屋を支えた水辺に新たな息吹を～」を掲げ、新しい価値や役割を見出すことで「うるおい」「憩い」「にぎわい」をもたらす運河への再生をめざしています。また中川運河の都心側から「にぎわいゾーン」「モノづくり産業ゾーン」「レクリエーションゾーン」の3つに再編し、各ゾーンの特性を踏まえ、今後取り組む内容を掲げています。

人と運河をつなぐ3つのゾーン

ゾーンごとの再生イメージは以下の通り。

●にぎわいゾーン(都心側)

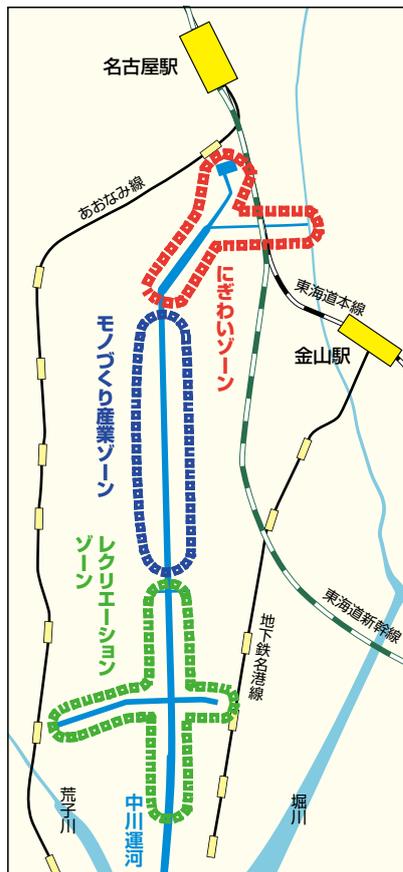
名古屋駅の南に位置する「ささしまライブ24」の開発と連携しながら、にぎわいのある運河へと再生します。緑地・プロムナードの設置や沿岸用地へのカフェ・レストランなどの誘致、運河の魅力と回遊性を高める水上交通の運航、運河の歴史や文化・芸術を楽しむ市民活動の継続的な展開を図ります。これらにより、都心地域に集まる人びとが訪れたくなるような「港と文化を感じる都心のオアシス」の形成をめざします。

●モノづくり産業ゾーン(中央)

名古屋の産業・経済を支えてきた歴史を継承しながら、モノづくりの未来を支える産業との融合を図ります。また、緑地・プロムナードの設置、緑化の推進などにより、さらに魅力的で働きやすい環境とします。これらにより、産業空間としての価値が一層高まるような「モノづくりを支えるキャナルストリート」の形成をめざします。

●レクリエーションゾーン(港湾側)

にぎわいのある名古屋港ガーデンふ頭や、港明地区の開発と連携しながら、周辺の緑地・公園との回遊性を高めます。また、名古屋港漕艇センターを中心とする水上スポーツのさらなる活性化を図ります。これらにより、緑豊かな水辺で人びとが気軽に交流を楽しむような「水と緑のレクリエーションフィールド」の形成をめざします。



中川運河再生計画のゾーニング



大規模な再開発計画が進む「ささしまライブ24」地区(写真提供:名古屋高速道路公社)



中川運河の都心側「にぎわいゾーン」のイメージ



中川運河の中央に位置する「モノづくり産業ゾーン」のイメージ



中川運河の港湾側「レクリエーションゾーン」のイメージ

「ARToC10」の試み

中川運河では、民間の団体により、岸辺を清掃しコスモスの花で彩る「コスモスプロジェクト」、水上スポーツなど、いろいろなイベントが行われるようになっていきます。倉庫の壁面をスクリーンに見立てたデジタル映像や倉庫内でのパフォーマンスなどはクオリティも高く、すでに人気イベントとして定着しています。

こうした市民の動きを背景に名古屋都市センターは、中川運河を舞台にした市民交流や創造活動を継続的に支援する「中川運河再生文化芸術活動助成事業」(愛称:ARToC10=アートックテン)を今年度からスタートさせました。これは「中川運河再生計画」に賛同した、熱エネルギー機器メーカー、リンナイ(本社・名古屋市中川区)からの寄付を活用したものです。この寄付は毎年1000万円、今後10年間で総額1億円が予定されています。第1回のごときは、応募の8団体から映像、インスタレーション、音楽などを駆使する3団体が選ばれています。

愛称「ARToC10」は、Art(アート)、Re(再生)、Try(挑戦)、of、Creation(創造)の頭文字と、助成期間10年間の「10」から生まれたもので、ARToC10の文字と中川運河の形をアレンジしたロゴもつくられました。

新しい運河へ多彩な計画

東邦ガス(本社・名古屋市中熱田区)は、中川運河の南部沿岸にある同社用地で集合住宅、商業施設、業務施設、スポーツ健康施設などによるまちづくり計画を進めています。場所は名古屋港区港明二丁目の同社工場跡地。開発面積は約31ha。現在、名古屋市をはじめとする行政機関などに関係し協議中で、2015~2016年ごろから段階的に供用開始の予定です。

予定地は名古屋都市計画マスタープランで「まちづくり推進の重点地域」に位置付けられている場所。これを受け、東邦ガスの開発に対する基本的な考え方は「人と環境と地域のつながりを育むまち」としています。

同社ならではの特徴としては、エリア内のエネルギーを一括管理するネットワークを構築し、国内トップレベルの省エネとCO2の削減をめざすこと。同社はこれを「スマートタウン」の実現と呼んでいます。また再生可能エネルギーや未利用エネルギーなども積極的に活用する方針です。

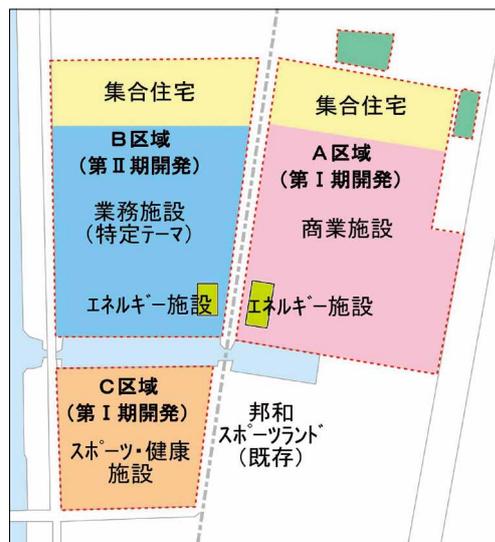
ショッピングモールやスポーツ健康施設などの充実で、これまで水上スポーツエリアとして利用されてきた、中川運河「レクリエーションゾーン」に、また新たな魅力が加わりそうです。



中川運河で行われるドラゴンボートのレース



愛称「ARToC10」のロゴ



東邦ガスの港明用地開発における施設配置計画(資料提供:東邦ガス)

中川運河再生への取り組みは、名古屋圏の明日を左右する試金石

かつて中川運河は、港と都心を結ぶ水運物流を担ってきました。しかし、それはもう過去の話。発想を切り替えなければならぬ。その点、名古屋市と名古屋港管理組合がつくった「中川運河再生計画」は、運河の新しい役割とさまざまな可能性を追求しており、私は期待しています。あとは、それをどう実現するかです。中川運河は、水上物流としての運河の役割が終わった昭和40年代から今日まで、時代とともに変化してきました。今回の再生計画は、それをよく踏まえています。しかし今はもう、それをどう実現す

るかが問われる段階なのです。

例えば、にぎわい創出にしても水が汚いと人は寄らない。ヘド対策などをどうするのか。兩岸の土地利用についても新しい産業育成に期待するが、具体的な見通しはどうか。水上スポーツを活性化するなら、現施設及び計画施設の用途を考え規制を見直すことも必要です。中川運河のような大きな水域が都心にあるのは、3大都市圏のなかで名古屋圏だけです。これをどうやって新しい力と魅力に変えていくのか、名古屋圏の明日を左右する試金石だと思います。

NPO法人 伊勢湾フォーラム
理事長
むら しみひろし
村上廣さん

